■ フォト・エッセイ ■

アフリカ
――水と共に生きる――

写真・文
久野武志
Takeshi Kuno

町に数カ所ある共同の水場は朝晩のみ開かれ、それ以外の時間は木箱で施錠されている（コンゴ民主共和国）

「湯水のように使う」という言葉が、日本語にはある。世界平均の約二倍の降水量を持つ日本では、水は無料で無限にあるものという観念が古くからあったようだ。ミネラルウォーターが一般普及し、水の安全性への意識が高まる一面もあるが、空梅雨後の数日以外、節水を心がけている日本人は少ない。

しかし現在、世界のさまざまなところで、さまざまな人々が水を求め、分かち合い、時に奪い合う。特にアフリカのように環境が苛酷で、インフラが十分整っていない地域では、人間が生きるうえでの本質的なものが日常に現れやすいのだろう。水にまつわるたくさんの生活、光景を自然に目にすることができる。アフリカ大陸の二〇カ国以上を旅してきた中で触れてきた、水と人々の生活を紹介したいと思う。

エチオピア東部オガデン地方のソマリア難民キャンプを訪ねた時のことだった。殺伐とした荒野がどこまでも続く中、UNHCRの車で骨がゆるむかと思うほど揺れるドライブを五時間ほど続けた後、キャンプに着いた。木の枝を曲げておわん状に作られたソマリ人独特のテントがひしめき合い、棘のある潅木に朽ち果てることのできぬビニールの袋が無数、刺さっては風に揺れる。取材を進めるうち、水場を案内してもらうことにした。てっきり他の国々で見たような、幾つかの蛇口が集まる共同水道を見るものと思っていたが、案内された光景に度

乾燥地帯の中でまれに点在する自然の池。雨水の貯まったものでよどむが、地元の人々には大切な水（エチオピア）

肝を抜かれた。ドライヤーのような熱風が吹きすさぶ荒野の中に、「まぐれ」のように存在した自然の貯め池。これがこのキャンプの水場であった。

あっけにとられている私をよそに、難民たちが思い思いの容器を手に水をすくいに来た。食用油が入っていた、二〇リットルほどのプラスチックタンクが多い。しかし水深も十分あるわけでないので、バケツでプールの水をひとすくいにするようにはいかない。どうするのかと見ていると、女性がひとり、ひょいと腰布を上げ、じゃぶじゃぶと水の中に入っていく。そして小さなお皿で少しずつすくいながら、タンクに移していた。満水になり、陸に上がってくる彼女に水を見せてもらうと、カフェオレのような見事な黄土色。さらにはエビに似た、五ミリほどの小さな虫が数匹、元気に泳ぎまわっていた。「毎日この水を汲んでいるわ。別に問題ないわよ。」女性はそう言うと、二〇キロの重さを軽々と頭上に上げ、去っていった。

「ここはＵＮＨＣＲの管理外で、給水活動は行っていない。清潔な水がないために、子供の体調不良も多くみられる。」ガイドしてくれたＵＮＨＣＲの現地職員シェリフは説明してくれる。せめて水を沸騰させることはできないのか、と聞くと「もともと遊牧民の彼らは自然の水を厭うことはなく、むしろ色のついた水を好む人もいる。何よりこの地域には燃料となる薪が十分にない

酷暑の中、走りゆく車を追いかけて水を売る少年（ナイジェリア）

PHOTO ESSAY

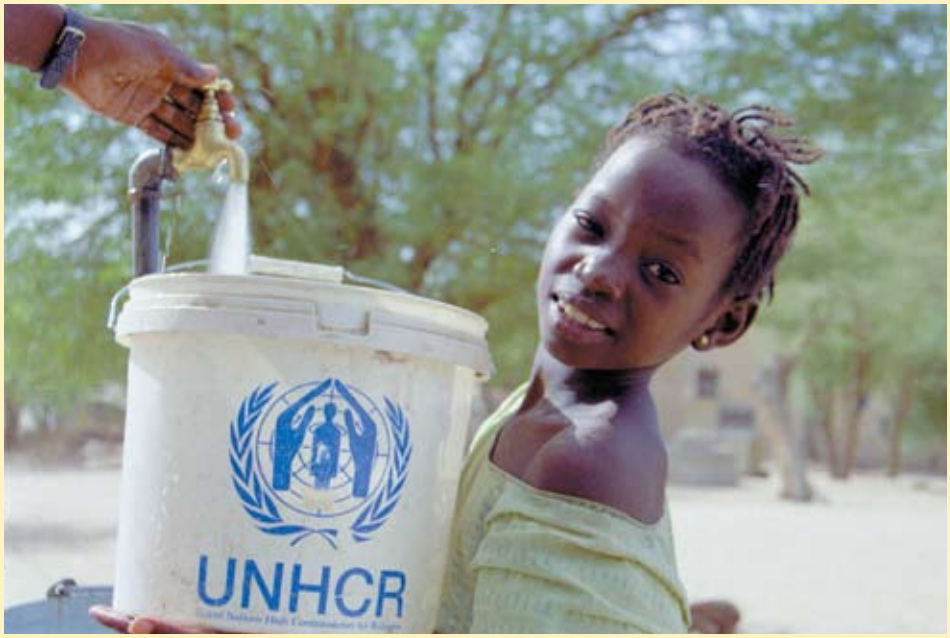
アフリカ / Africa

んだ。」

ところ変れば生活習慣も変る。ためしにこの水を飲んでみよう。虫を慎重に舌で押し返しながら、おそるおそる喉にすべらすと、雑味や変な匂いもなく、冷たさもあって結構いける。しかしこの水を毎日飲み続けるには、ちょっと勇気がいる。

ところで降雨量が十分にあれば楽に水が手に入るかというと、そうでもない。コンゴ民主共和国では、年の半分を占める雨季には土砂降りの日々が続くが、町の人々は朝晩いつも共同の水場で長い時間を費やす。雨水があっても、それを貯蓄するダムがない。そして、人口に見合うだけの上水施設がない、というのが理由だ。結果、人々は数少ない水道に集まり、行列ができる。貴重な水場を管理するために時間が制限され、それ以外は蛇口に鍵がかけられる。一軒の家にいくつもの蛇口が存在する日本の家庭から、なんと遠くまで来てしまったことか。それでも重い水を運ぶ子供たちは、慣れたものか、笑顔に鼻歌を添えて運びゆく。「水は重いもの」という紛れもない事実は、日本では持ち上げる機会が少ないため忘れられ、ここでは多すぎるため認識が薄れる。

水にまつわる人々として、もうひとつインパクトがあったのが、ナイジェリア北部の主要都市カノで見た「水を売る少年たち」だった。彼らは早朝から仕込んだ袋入りの水を手に、交通量の激しい交差点に立つ。ここが彼らの職場だ。そして走りゆく車に



共同の水場で水を受ける少女（マリ）

向けて「冷たい水あるよ！」の大アピールをかける。酷暑のカノでは、日中水を飲まないことには脱水症状をおこしてしまう。水を欲しがる車も多いが、交通量の多い通りで車を止めるわけにもいかない。どうなるかというと、少年たちが全力で走り、車窓に水を差し出し、五円ほどの代金をキャッチするのだ。そしてここでは、「冷たさ」こそ最重要ポイントであり、乗客の手が少しでも「ぬるい」と感じた水は、容赦なくはねのけられる。少年たちも心得たもので、即売用に数個手に持ち、他の商品は日陰に置いた発泡スチロールの箱に入れておく。保冷作用のために、箱の中は氷が詰まっているのかと思えば、資金不足ゆえか、これまた水で満たされているのが泣かせる。ちなみに彼らが売る水、一応は浄水だが、施設の老朽化により品質はあやしいものである。一度、未開封の水の中にふわふわとタンポポの綿毛のように浮かぶカビを見て、あきれてしまった。

人体の約六〇％は水で占められているという。言葉にするまでもなく、水とは生命に欠かせないもの。天から降り注がれ、大地を通して人に収まりゆく水。その水をめぐって繰り広げられる、さまざまな人間の暮らしとドラマ。アフリカの旅は、いつもたくさんのことを私に教えてくれる。

（くの　たけし／フリーカメラマン）